

(情報名) ヤマブドウの垣根仕立て(一文字二段整枝)による安定生産技術	
【要約】 ヤマブドウを列間2.5m、樹間4mに栽植し、一文字二段整枝で短梢剪定を行うことで500kg/10aの高収量が得られる。この場合、雄株を15%程度混植する必要がある。また年500kg/10a程度の堆肥施用で樹勢維持、結果母枝の充実が図れる。	
中山間農業技術研究所 試験研究部	【連絡先】0577-73-2029

【背景・ねらい】

飛騨地域の山中に多く自生するヤマブドウは、ワインやジュース等への加工で特産品化が期待できる品目であるが、増殖方法、栽培方法等に不明な点が多い。

そこで、整枝法、栽植密度ならびに施肥法について検討し、安定生産技術を組み立てる。

【成果の内容・特徴】

1. 支線の高さ1.0mと1.8mの垣根で、主枝を主幹から左右へ2段配置し(一文字二段整枝)、結果母枝を2~3節とする短梢剪定を行うことで、10a当たり500kg程度(栽植本数133本/10aうち雌株106本の場合)の収量が得られる(図1、表1)。
2. 一文字二段整枝の剪定作業時間は10a当たり19.1時間と扇形整枝に比べ約1/3と短く省力的である(表1)。
3. 一文字二段整枝では、樹齢の経過と共に樹冠が拡大するため、列間2.5mとした場合、樹間を4m(栽植密度10a当たり100本うち雌株80本)とすることで、間伐の必要がなく10a当たり500kgを超える収量(成木)が安定して得られる(表3)。
4. ヤマブドウは雌雄異株であるため雄株を混植するが、安定着果のためには雌雄の株間隔を8m以内とする必要があり、これから換算すると混植率は15%程度が適当である(図2)。
5. 成木への牛糞オガコ堆肥施用は、樹勢維持、結果母枝の充実に有効であり、その施用量は10a当たり500kg程度が適当である(データ省略)。

【成果の活用面・留意点】

1. 積雪深の深い地域では、定植時に斜めに寝かせて植え付け、積雪前に雪害防止のため支線より主枝をはずし寝かせるなどの対策が必要である。
2. 肥沃な土壌では、新梢伸長が旺盛となり花芽形成が遅れたり、過繁茂で病害虫被害が増加することがあるので、施肥を控える。また、樹間距離を広げるなどの対策を行う。
3. 堆肥は十分完熟したものを使用し、施用量は土壌条件、樹勢に応じて強樹勢とならないよう適宜調整する。

【具体的データ】

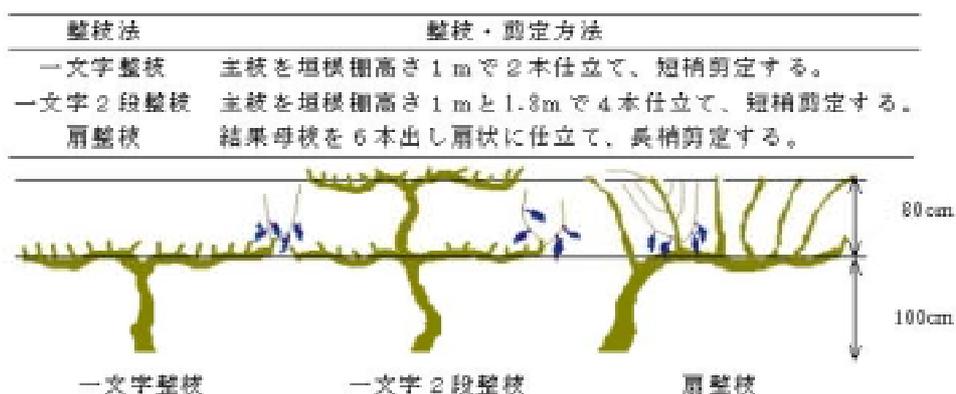


図1 整枝法（模式図）

表1 整枝法と収量・品質および剪定作業時間^z（2000）

区	発芽期 月日	収量 ^y kg/10a	果房重 g	健全果率 %	糖度 %	酸度 %	剪定作業時間 h/10a
一文字整枝	5. 6	244	87.3	100.0	15.3	1.69	-
一文字2段整枝	5. 6	477	90.7	95.8	14.0	2.21	19.1
扇整枝	5. 6	583	80.0	91.9	13.9	2.21	30.8

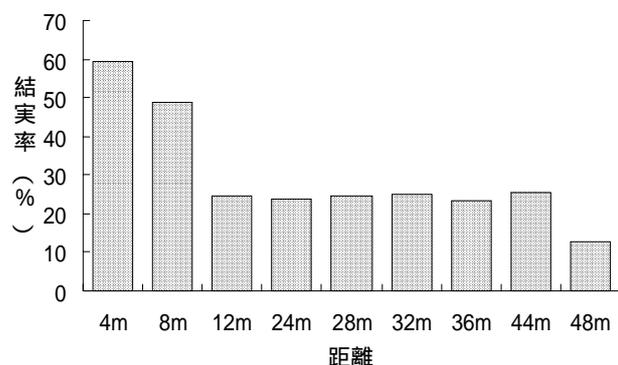
z 6年生時

y 10a当たり収量は2.5×3.0mの栽植本数133本/10a（106本）で試算

表2 栽植距離^zと収量および生育（2000）

区	発芽期 月日	収量 kg/10a	栽植本数 本/10a	幹周 cm	新梢数 本/樹	新梢数/ 結果母枝1m	平均新梢長 cm
5m区	5. 6	400	80(64)	9.7	63.0	6.3	41.8
4m区	5. 6	533	100(80)	9.8	73.7	9.2	46.5
3m区	5. 6	475	133(106)	8.7	46.3	7.7	43.3

z 整枝法は一文字2段整枝、列間2.5m、6年生



ヤマブドウの花器（模式図）

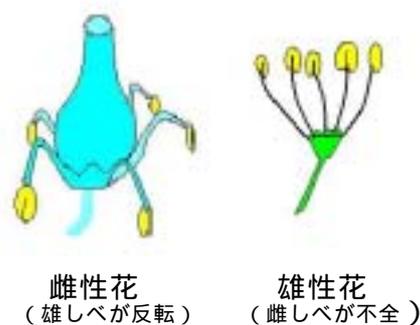


図2 雄株からの距離と結実率（1996）

研究担当者：神尾真司、梅丸宗男、若原浩司、川部満紀、滝孝文、宮本善秋、浅野雄二